



ウィリアム・バード一世とフロンティア：
1680-90年代のジェイムズ川フォールズ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 滝野, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002690

ウィリアム・バード一世とフロンティア —1680-90年代のジェームズ川フォールズ—

滝野哲郎

ウィリアム・バード一世 (1652-1704) は、18世紀ヴァージニア植民地の代表的プランター、ウィリアム・バード二世の父親である。1669年、17歳でロンドンからヴァージニアに渡ったバード一世は、当時フロンティアであったジェームズ川上流のヘンリコ郡フォールズにおいてインディアンとの取引に従事するようになった。やがてタバコ栽培のプランテーション経営や植民事業などにも手をひろげて富を蓄積するとともに、1680年代には植民地政治に深くかかわるようになった。ヴァージニア植民地では、ちょうどその時期、タバコ栽培・交易・土地投機などで成功したプランターが上層階級を形成して政治権力を握るようになっていたが、バードもその一人であった。¹

インディアンとの取引によってまず地歩を固め、やがて植民地の実力者の一人となったバード一世にとって、ヴァージニアのフロンティアとはどのようなところであったのだろうか。この小論では、とくにジェームズ川のフォールズにおいて、バードが先住民インディアンとどのようにかかわっていたのかについて、1680年代から90年代の書簡を通して見てみたい。

1

ジェームズ川のフォールズは、現在のヴァージニア州の州都リッチモンドに位置していた。17世紀のヴァージニア植民地において、この場所がどのような状況にあったのかをまず見ておきたい。²

ヴァージニア植民地は、1607年、大西洋岸からジェームズ川をおよそ

60キロさかのぼったところに、ジェームズタウンを建設することによってはじまった。当初、伝染病や飢餓によって存続の危機にさらされたが、のちに植民地の主要商品作物となるタバコの生産が拡大するにつれて、イギリスからの移民も増え、その移住地を西方に向けてしだいにひろげていった。

17世紀、ヴァージニア植民地の住民が生活していたのは、おもに大西洋岸からおよそ100キロの幅でひろがる海岸平野であった。ここは、気候が温暖で土地も肥沃であったため、暮らしやすく、作物を育てるのに適していた。海岸平野の西方にはピードモント台地がアパラチア山脈の麓まで続いている。そしてこの海岸平野とピードモント台地の境界線をなしているのがフォールライン（瀑布線）である。ピードモント台地の丘陵を流れてきた河川が平野部へ出るとき、急流や滝になるのである。

大西洋岸からこのフォールラインまでは船でさかのぼることができ、人の往来や物資・作物の運搬が容易であった。フォールラインが、船でたどりつける終着地であり、馬車に乗り換える場所でもあったので、しだいにそれに沿って町ができ、発展していった。現在、アメリカ南部には、フォールラインに沿って、メリーランド州のボルティモア、首都ワシントン、ヴァージニア州の州都リッチモンド、ノースカロライナ州の州都ローリー、サウスカロライナ州の州都コロンビア、ジョージア州オーガスタといった都市が並んでいる。

17世紀、ヴァージニア植民地では4本の大河に沿って開拓が進んでいったが、なかでももっともはやく開けたのがジェームズ川流域であった。この川のフォールラインは、ジェームズタウンから80キロ上流にさかのぼったところ、つまり現在のリッチモンドに位置する。リッチモンドはバード一世の息子のバード二世によって1737年に建設されたのであるが、それ以前、この川の南岸にはフォールズと呼ばれた場所があった。

17世紀のおわりごろ、このフォールズのあたりはまだヴァージニア植民地のフロンティアであった。先住民インディアンが暮らす「未開の」土地がはじまるところで、かれらとの接触の場ともなった。このあたり

からさらに奥地にかけて、インディアンとの取引がおこなわれていた。交易商はインディアンから毛皮などを入手し、そしてインディアンは白人の装身具、生活用品、武器などを手に入れたのである。

2

バード一世がフォールズに来ることになったのは、この地に叔父のトマス・ステッグがいたからである。ステッグは早い時期からここで交易所を開き、インディアン交易によって財を成し、そして参議会議員として植民地政治にもかかわりヴァージニアにおける有力者の一人となっていた。かれには子どもがいなかった。そのため、体調に不安を感じるようになったとき、ロンドンにいる姉の長男ウィリアムが事業を継いでくれることを望んだのである。

フォールズに来た17歳のバードは、叔父のステッグから仕事についてさまざまなことを学び、フロンティアの環境と生活にしだいに馴染んでいった。1670年、ステッグが他界すると、バードは遺産として3000エーカーの土地と事業を引き継いだ。バードは、インディアン交易に熱心に取り組み、フロンティアの地理やインディアンに精通した人物としてひろく知られるようになっていった。

資産に恵まれ事業も順調であったバードは、将来を嘱望される青年であったにちがいない。1673年、クロムウェル政権を逃れてヴァージニアにやってきた王党派貴族ウォーラム・ホーズマンデンの娘メアリと結婚することになる。21歳のメアリは、3年前に前夫に先立たれ未亡人となっていた。ちょうど同じ頃、彼女のいともヴァージニア総督ウィリアム・バークリーと結婚した。このようにしてバードは、相続と結婚によって数年のうちに植民地社会における成功への足場を築きあげていったのである。

1670年代、バードが植民地社会において頭角を現しはじめた頃、多数の移住者がヴァージニアの西方に移動し、インディアンの土地に侵入するようになった。インディアンとの間に衝突がおこるようになると、移

住者はヴァージニア政府に対策を求め、政府はインディアンの襲撃に備えるために砦を建設した。バードもその建設にかかわり、1674年にはヘンリコ郡民兵隊の大尉に任命されて、55名の部下を従えてフォールズの近くで砦の守備にもついていた。インディアンとの衝突に悩む移住者は、政府の対策には納得せず、武力で対処することを強く訴えたが、総督は、かれ自身がインディアン交易にかかわっていたこともあって、砦を建設するだけで、移住者の要求に真剣にこたえることはなかった。

この時期、バークリー総督とは姻戚関係にある若い資産家ナサニエル・ベイコンがイギリスからヘンリコ郡に来てインディアン交易を手がけようとしていた。折しも政府はインディアン交易に制限を加える方針をとるようになった。1676年、政府のインディアン政策に不満を抱く人々は、このベイコンを指導者にして反乱をおこし、インディアンの討伐に向かって、手当たり次第にインディアンを殺害したのである。³

実は、バード一世もこの事件にかかわっていた。ベイコンの近くで暮らしていたバードは、インディアンの襲撃によって使用人を失っていた。そして反乱勃発の場面にも居合わせていた。かれやベイコンが四人で酒を飲んでいたとき、インディアン対策への不満が噴出した。ちょうど川向こうでインディアン討伐のために人々が集まっているという。その場に出向くと、ベイコンが指導者として迎えられたのである。バードは、はじめのうちはインディアン討伐隊に加わっていたが、まもなく総督側に転向した。かれ自身も政府のインディアン対策に不満はあったが、おそらく徹底的に政府に反抗を続けるベイコン一派にはついていけなかったのであろう。反乱は結局、ベイコンの突然の病死によって挫折してしまった。⁴

ベイコンの反乱をうまく乗り切ったバードは、このあと政治の世界で活躍するようになる。1677年にヘンリコ郡選出の代議会議員になり、2年後には民兵隊の大佐に昇進してヘンリコ郡の民兵隊を指揮する立場についた。さらに1682年、参議会議員に選出されたバードは、30歳で植民地指導層の一員となった。そして晩年には参議会議長となり、総督不在時には代理総督も務めた。

このように、バードは自分の置かれた状況を的確に把握し、あらゆる機会を自らの向上に活かす才能をもっていたといえよう。17歳で大西洋を渡ってまもなく莫大な遺産を相続し、家柄と資産に恵まれた相手と結婚することで上層階級との結びつきを強め、そしてベイコンの反乱では状況をうまく見きわめて自分の立場を保持し、その後は植民地政治において着実にその地位を高めていったのである。このようなバードの資質は、当然、可能性と危険に満ちたフロンティアにおいてインディアン交易に従事するさいにも十分に発揮されることになった。

3

ジェイムズ川のフォールズでバードは妻メアリや子どもたちと暮らしていた。子どもが成長するにつれ、フロンティアでは十分な知識や教養を身につけさせることができないと考えたのであろう、4人の子どものうちの3人を順次イギリスの義父のもとに送っている。由緒ある家柄である妻の実家ホーズマンデン家に子どもの教育を任せたのである。1680年代のおわりごろ、長男ウィリアムと長女スーザンはすでにイギリスに滞在していたので、フォールズにいたのは下の二人の娘アーシュラとメアリであった。家族は石づくりの建物で暮らし、そばには1800エーカーのプランテーションがあってタバコが栽培され、また近くには交易所があってさまざまな商品がおかれていた。

このフォールズからは、奥地へ向かう交易のルートがのびていた。かれのもとで働く交易人はここからインディアンの居住地を目指し、隊商を組んで出発していった。それは、15人ほどから成る一隊で、100頭の荷馬をつれて出かけるというものであった。ときには、この地から400マイルも離れた場所まで出かけることもあった。そして南方のサウスカロライナやその近辺に居住するカトーバやチェロキー・インディアンと取引することもよくあった。⁵

当時の交易において商人の多くが求めたのは、インディアンがもたらす毛皮であった。ビーバーや熊の毛皮、そして鹿皮は、ヨーロッパでの

需要が高く、高値で取引されていたので、大きな利益を生んだ。ほかには薬草や鉱物なども取引された。一方、これらと交換するものとしてインディアンが求めたのが、ビーズなどの装身具、布地、鍋、やかん、斧、銃、弾薬、ラム酒などであった。

取引を有利な条件で成立させるためには、インディアンが要求する品々を十分にそろえておくことが必要である。そのためバードはロンドンのエージェントを通してさまざまな品物を取り寄せていた。かれはエージェントにつきのように書き送っている。「インディアンが喜ぶようなビーズや細々したものなど、交易に使う商品をすぐに送ってもらいたい」。ときには、バードが、品物に細かい注文をつけることもあった。「インディアンから布地についての不満が多かった。色が明るすぎる。インディアンは濃い青色を好む。インディアンのところには毛皮が十分に蓄えられているが、よい品物をもっていかなければうまく取引ができない」。布地の色だけでなく、ビーズの大きさ、やかんの穴など、品物の良し悪しが取引に影響した。当時の交易商のなかには、インディアンを狡猾にだましたり、傲慢な態度で接するものもいたが、バードは、かれらの要望にこたえることで信頼をえて、そして取引を順調に進めていた。⁶

バードは鉱物の取引もしていた。そしてインディアンがもたらしたのを見て、自ら採掘にかかわることも考えるようになった。フォールズから約50キロ離れたところで水晶が見つかったのである。イギリスの知人への書簡にはつぎのように記されている。「以前小さな水晶をいくつか送りましたが、あれからさらに多くの水晶が手に入りました」。そして、その水晶がどれくらいの価値があるかを知人に尋ねている。「採掘のためにインディアンを雇いましたが、岩石が非常に堅く大きいので、インディアンも水晶を取り出すのに苦労しています」。バードは、ここでインディアンを労働力として使って収益をあげることを考えていたのである。⁷

また、ときには親しいインディアンから、かれらが使う日用品などを集めていたこともあった。イギリスの友人が子どもへのプレゼントとしてインディアンの珍しいものが欲しいというのである。バードは、衣服、

貝の首飾り、モカシン、帽子などを近所のインディアンから手に入れ、バスケットにいれて、それに弓と矢もつけて送ったのである。⁸

バードはインディアンとの関係を維持することに努めていたが、それでも交易がいつも安定しているとは限らなかった。インディアンへの品物が不足したり、インディアンのところに毛皮がなかったり、また部族間の紛争によって取引が落ち込むこともあった。1690年にはつぎのように記している。「インディアンへの品物は十分にあるが、取引は低調である。ビーバーや毛皮がほとんど手に入らない。インディアン同士が戦いをしているためだ」。このようなときは、バードはただ待つしかなかった。⁹

インディアン交易にはときとして危険もつきまとった。交易の行き帰りに、バードの隊商が襲撃を受けることがあった。1684年、バードの交易隊6人全員が帰路で殺害された。大事な使用人をなくしただけでなく、荷物の損失も大きかったのであろう。「もし無事に帰還していれば、この旅は非常に大きな利益があげられたはずである。私は大きな損失を被った」。この出来事のあと、バードは早速インディアンとの話し合いに出かけていっている。「家からおよそ12マイル上流のところで、50人のセネカ・インディアンと会って話をした」。そうすると、かれらは「これからはイギリス人にたいして友好的にふるまうと約束してくれた」。¹⁰

このように、当時のインディアン交易には多少の危険がつきまとうこともあったが、バードはかれらとの関係を維持することに努め、35年間にわたって交易で着実に収益をあげていったのである。

4

1680年代になると、ヴァージニアにおけるインディアンと白人の関係は、以前に比べると平穏になった。かつてヴァージニア東海岸で強い勢力を保っていたポーハタン族は、17世紀前半の二度の戦争によって衰退し、それ以降植民地内には、数百人程度の戦士を擁する数部族とそのほかの小規模な部族が存在するだけになっていた。もはや大きな衝突はなくなり、

ただ散発的にもめごとが生じるくらいであった。

一方、南方のカロライナ植民地ではタスカローラ・インディアンが勢力を維持していた。かれらのところには6000人から8000人ほどの戦士がいたが、白人には概して友好的であった。それにたいして、西方のセネカ・インディアンは、およそ4000人の戦士を擁し、ほかの部族よりもやや攻撃的なところがあって注意が必要であった。そしてさらに南方にも多くのインディアンの部族が存在していた。遠方まで出かけるヴァージニアの交易商人にとっては、道中で遭遇するインディアンはつねに脅威となったのである。

当時、ヴァージニア植民地において、インディアンの脅威にたいする備えとして機能していたのが民兵組織である。インディアンとの間に紛争が生じたときや不穏な動きがあると、民兵がただちに召集された。インディアンやフロンティアの状況に詳しくあったバードは、民兵隊においても重要な役割を果たし、大尉としてフロンティアの砦において守備の任についていたこともあった。そして、80年代になると大佐に昇進したバードは、フォールズ周辺の民兵隊を統率し、地域防衛の任務についていた。万一インディアンの襲撃があったとき、住民の安全確保は緊急を要する仕事である。1684年、ジェームズタウンに滞在し参議会に出席していたバードのもとに、ヘンリコ郡でインディアンに不穏な動きが見られるという情報が伝えられた。「フロンティアのインディアンに関する知らせが届き、私は急遽フォールズに戻るようになった」。民兵隊の任務は、議会や政治の仕事よりも優先されたのである。¹¹

フロンティアでは実際にインディアンとの間にもめごとや衝突がしばしばおこっていた。1689年6月の書簡にはつぎのように記されている。「この近辺では最近困ったことがおこっている。3週間ほど前からこの周辺やアポマトックスで、見慣れないインディアン数人が出没するのがたびたび目撃されている。かれらは銃で牛や豚を撃っていた。民兵に二度召集をかけたが、そのインディアンたちを見つけることはできなかった。このあたりの住民たちはひどく恐れている」。そしてバードは「人々の安全を確保するために力を尽くさなければならない」と記している。も

し住民の生命や財産が脅かされるようなことになれば、民兵隊大佐として迅速に対処することがバードの責務であった。¹²

その翌月にも事件がおこった。「主人のもとから先頃逃亡したインディアンの使用人が、二人のタスカローラ・インディアンに遭遇し、そのうちの一人を殺害した」。この件でタスカローラ族が賠償を要求してきたので、バードはかれらの代表と犠牲者の家族に会って話し合っている。この問題を解決するには「被害者の家族にたいして賠償するしか方法はないであろう」と記している。バードは、インディアンとの間の問題解決にもあたっていたのである。¹³

1690年にはバードのところでも事件が発生した。「つい先日、インディアンが私の使用人一人を殺し、二人を連れ去った」。バードは、「このたまにおこる小さな襲撃には対処していくことができるであろう」という。だが、バードが一抹の不安を感じているのは、はるか西方のインディアンの脅威であった。万一アパラチア山脈を越えたオハイオ川流域のインディアンがフランス勢力と連携すれば、ヴァージニア植民地にとって脅威となるかもしれない。たしかに、かれらがアパラチア山脈を越えて、ヴァージニア西部のフロンティアに侵入してくる可能性もあったのである。¹⁴

バードは家族の安全を考えたにちがいない。フォールズで交易やプランテーションを維持する一方で、生活の拠点を下流に移動することを考えるようになった。バードは下流 30 キロのウェストーヴァーに 1200 エーカーの土地を購入した。1690 年、義父への書簡でつぎのように記している。「昨年購入したウェストーヴァーに一年以内に移り住もうと考えています。そこであれば、ともかく私たち家族は危険から逃れられ安全に暮らせます」。こうしてバード一家は、1691 年、インディアンの不安が多少とも残るフォールズをあとにして、ウェストーヴァーに木造家屋を建て、引っ越したのである。この地なら、家族が安心して暮らせるだけでなく、政治の仕事でウィリアムズバーグへ出かけるのにも近くて便利である。¹⁵

ウェストーヴァーに移ってからも、もちろん、フォールズの近辺ではインディアンとのもめごとは続いていた。1695 年には、「夏の間、この

周辺のフロンティアでは、ふだん見かけないインディアン数人が困った問題をおこし、住人一人が殺害された。そのインディアンたちの行方が把握できない」。民兵隊が問題をおこしたインディアンを追跡するが、捕まえることは容易ではない。バードは、親しいインディアンに追跡の手助けをしてもらうことが必要かもしれないと考えるのである。¹⁶

このように1680年代から90年代は、フロンティアのフォールズにおいてインディアンとの間に問題が生じることもあったが、これもしだいに減る傾向にはあった。ヴァージニア全体で見れば、インディアンの人口が急速に減少し、それにたいして、白人の人口が増加の一途をたどっていったからである。そして18世紀にはいると、この傾向はさらに加速した。バードの義理の息子でインディアンに強い関心をもっていたプランター、ロバート・ベヴァリーは、『ヴァージニアの歴史と現状』の中で、「ヴァージニアのインディアンはひどく衰退してしまった」と述べている。ノットウェイ、パマンキー、メヘリンなどのインディアンが生活しているが、「これらすべてを合わせても、戦える男は500人にも満たない」。そして「かれらは貧困の中で暮らしている」。ベヴァリーによると、「近隣のインディアンは服従した状態にあるので、不安になることはまったくない」。¹⁷

このように、ヴァージニア内のインディアンはたしかに衰退しつつあったが、フロンティアのフォールズのあたりではいまだにもめごとが生じていたし、さらにその西方のオハイオ川流域や南方のカロライナでもインディアンの脅威がうすれることはなかった。バードは、インディアン交易に携わり、こういった周辺の事情に精通していたので、民兵隊の大佐としてもインディアンの問題に機敏に対処できたのである。

5

住み慣れたロンドンをあとにしてフォールズの地を踏んだバードには、目の前の広大な世界はかれにとって可能性をためす絶好の場であると思えたにちがいない。そこはフロンティアであり、そしてインディアンが

暮らしていた。叔父の事業を引き継いだバードは、インディアンとの交易に携わり、かれらとの関係を保つことに努めていた。こうしたインディアンとのかかわりは、バードを経済的成功に導いただけでなく、地域社会におけるかれの存在意義を高めたのである。

こののちバードは、さまざまな事業にも手をひろげている。近隣のプランターが収穫したタバコの葉を買い取り、イギリスから取り寄せた品々を販売した。1690年代になって、ヴァージニア西部でもプランテーションの労働力として奴隷の需要が高まると、自分が所有する船ウィリアム・アンド・ジェイン号を使ってアフリカやカリブ海地域から黒人奴隷を輸入した。さらには、フロンティアでの植民事業にも取り組み、フランスからの移民をよぶことに力を尽くしたこともあった。バードは、何事にもつねに積極的で抜け目のない人物であったにちがいない。のちに息子のバード二世がウェストヴァーでジェントルマンのような生活を送るプランターであったのにたいして、父親は、1670年代から90年代のフロンティアという状況に自らをたくみに適応させて富を築いた逞しいビジネスマンであったといえるだろう。¹⁸

ロンドンで生まれ育ったバード一世が最後に故郷を訪れたのは、1687年、フォールズで暮しはじめて18年後のことであった。翌年の1月、バードはヴァージニアに戻る船上にあった。イギリスを出航して28日目、船はようやくヴァージニアがのぞめるところまで帰ってきた。そのときのバードの思いが書簡に記されている。「私たちの目に入ってきたのは、私たち自身のアメリカの地であった」。バードは、ヴァージニアのフロンティアにおいて自らの活動の場を見いだすことになったが、その過程を経て、この地を「自分自身のアメリカ」ととらえられるようになったにちがいない。¹⁹

注

- 1 バード一世の生涯については、Pierre Marambaud, *William Byrd of Westover, 1674-1744* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1971), 15-24; “William Byrd I: A Young Virginia Planter in the 1670’s,” *Virginia Magazine of History and Biography* 81 (1973): 131-50; “Colonel William Byrd I: A Fortune Founded on Smoke,” *Virginia Magazine of History and Biography* 82 (1974): 430-57 を参照。1680年代から90年代のヴァージニアの社会と政治については、Warren M. Billings, John E. Selby, and Thad W. Tate, *Colonial Virginia: A History* (White Plains, NY: KTO, 1986), 97-137 を参照。
- 2 17世紀後半のヘンリコ郡については、Louis H. Manarin and Clifford Dowdey, *The History of Henrico County* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1984), 33-70 を参照。
- 3 ベイコンの反乱については、Stephen Saunders Webb, *1676: The End of American Independence* (New York: Syracuse Univ. Press, 1995) が詳しい。
- 4 Richmond Croom Beatty, *William Byrd of Westover* (New York: Houghton, 1932), 5-7.
- 5 Beatty, 9-10.
- 6 “To Perry and Lane,” 1684-4-25, *The Correspondence of the Three William Byrds of Westover, Virginia, 1684-1776*, ed. Marion Tinling (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1977), 14. “To Perry and Lane,” 1685-3-29, *Correspondence*, 30.
- 7 “To Charles Howard,” 1688-6-16, *Correspondence*, 83.
- 8 “To John Clayton,” 1686-5-25, *Correspondence*, 61.
- 9 “To Perry and Lane,” 1690-7-21, *Correspondence*, 118.
- 10 “To Thomas Grendon,” 1684-4-29, *Correspondence*, 16.
- 11 “To Thomas Grendon,” 1684-5-20, *Correspondence*, 19. James Biser Whisker, *The Colonial Militia of the Southern States, 1606-1785* (Lewiston, NY: Edwin Mellen Press, 1997), 5-23.

- 12 “To Francis Howard,” 1689-6-10, *Correspondence*, 107-08.
- 13 “To Francis Howard,” 1689-6-10, *Correspondence*, 108.
- 14 “To Daniel Horsmanden,” 1690-6-25, *Correspondence*, 121-22.
- 15 “To Warham Horsmanden,” 1690-6-25, *Correspondence*, 121.
- 16 “To William Blathwayt,” Fall 1695, *Correspondence*, 174. Marambaud, “Colonel William Byrd I,” 454.
- 17 Robert Beverley, *The History and Present State of Virginia*, ed. Louis B. Wright (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1947), 232-33, 268.
- 18 Marambaud, “Colonel William Byrd I,” 455.
- 19 “To Warham Horsmanden,” 1688-4-16, *Correspondence*, 81.